

台湾 景気は底打ち

SMBC Asia Monthly

日本総合研究所 調査部
 研究員 松田 健太郎
 E-mail : matsuda.kentaro@jri.co.jp

4 四半期ぶりのプラス成長

2016年4~6月期の実質GDPは、前年同期比(以下同じ)+0.7%と、前期(0.7%)から持ち直し、4四半期ぶりのプラス成長となった(右上図)。

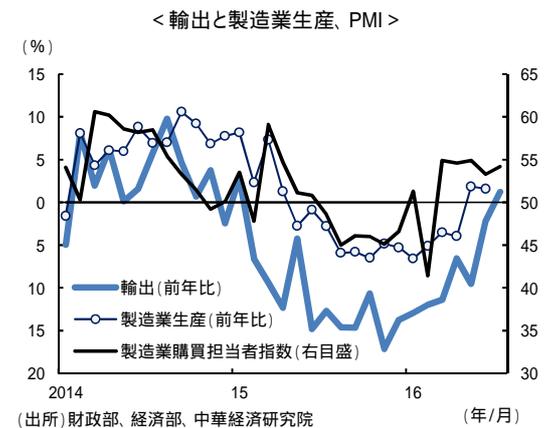
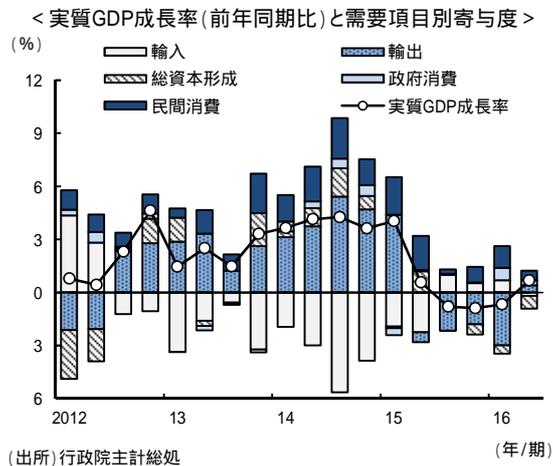
需要項目別の寄与度をみると、民間消費が+0.5%ポイント、政府消費が+0.3%ポイント、総資本形成が0.7%ポイント、純輸出が+0.6%ポイントであった。設備や建設投資の弱含みを受けて総資本形成が減少した一方、民間消費や輸出が成長率を押し上げた。GDPの約7割を占める輸出は、15年4~6月期以降落ち込みが続いていたが、足元でプラスに転じており、総じて景気の底打ちが確認された結果となった。

足元の輸出動向をみると、7月の輸出は前年同月比+1.2%と、18カ月ぶりに増加した(右下図)。品目別では、主要輸出品目である電子部品が、新型スマートフォン用の受注増を受けて同+10.0%と大幅に増加したほか、情報通信機器・精密機器などでも持ち直しが続いている。地域別では、これまで減少が続いていた中国向けやASEAN向けが6月以降プラスで推移している。なお、輸出の先行指標となる輸出受注も、2カ月連続で前年を上回る水準となっている。

こうした輸出の持ち直しを背景に、製造業生産が6月に前年同月比+1.6%となったほか、企業の景況感を示すPMIも50を超える水準が続いており、先行き企業をけん引役とした回復が予想される。ただし、外需環境は中国経済の鈍化に加え、英国のEU離脱など、依然先行きの不透明感が払しょくされておらず、景気回復ペースの加速は見込みにくいといえよう。

企業業績が上向きに

景気が底打ちするなか、台湾株は上昇に転じている。加権指数は8月入り後、9,000ポイントを超え、2015年7月以来の水準となっている。世界的に景気減速感が和らぐなか、新興国のスマートフォン需要増加に伴い鈍化していた半導体の需要が回復に向かっていることに加え、金融緩和期待による投資家心理の改善が株価を下支えしている。足元では、指数の17%のウェイトを占める半導体受託生産メーカーが4~6月期に過去最高益となるなど、主要産業の業績の改善が期待される。もっとも、新興国企業の台頭や中国内でのサプライチェーン構築に伴い台湾企業の優位性が低下している状況下、持続的成長を遂げるためには新産業育成をはじめとする産業構造改革を推進していく必要がある。



当レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。当レポートは単に情報提供を目的に作成されており、その正確性を当行及び情報提供元が保証するものではなく、また掲載された内容は経済情勢等の変化により変更される事があります。掲載情報は利用者の責任と判断でご利用頂き、また個別の案件につきましては法律・会計・税務等の各方面の専門家にご相談下さるようお願い致します。万一、利用者が当情報の利用に関して損害を被った場合、当行及び情報提供元はその原因の如何を問わず賠償の責を負いません。